第2章「熱心」 馬や牛と本気で向き合う飼い主たち

騎馬武者を乗せる馬や御所車を引く牛は大きく迫力があり、見る人の心を奪う。平安時代の行列を再現するためには欠かせないものだ。しかし近年、農作業の機械化が進むなど時代の変化とともに飼う人が少なくなってきており、行列に参加する馬や牛の確保に苦労している現状がある。なぜ飼い続けているのか。行列開催前に飼い主たちにその思いを聞いた―。

源義経公東下り行列に出演して56年。馬が好きでないと続けることはできない―。義経公役を乗せて歩く自慢の愛馬を見てほしい。

小岩（こいわ）　明美（としみ）さん

一関市狐禅寺

《Profile》1941年生まれ。幼いころから馬に接しており、宮城県涌谷町で開催される東北輓馬競技大会で優勝するなどの経験を持つ飼育のベテラン。現在は馬１頭、ポニー２頭を飼育している。

輓馬競技大会で優勝した際のトロフィーなど

目を見て会話する明美さんとタカラホワイト

一関市狐禅寺で造園業を営む明美さんは、源義経公東下り行列で義経公役を乗せる馬を貸し出して30年以上になる。明美さん方では日露戦争時代から代々、複数頭の馬を所有してきた。１９６０年代になると農業の現場では農耕馬に代わり耕運機が使われるようになり、次第に馬を所有する人が少なくなっていった。61年に馬を持たない出演者に貸し、旗持ちとして出演したのが行列に協力することになったきっかけだという。

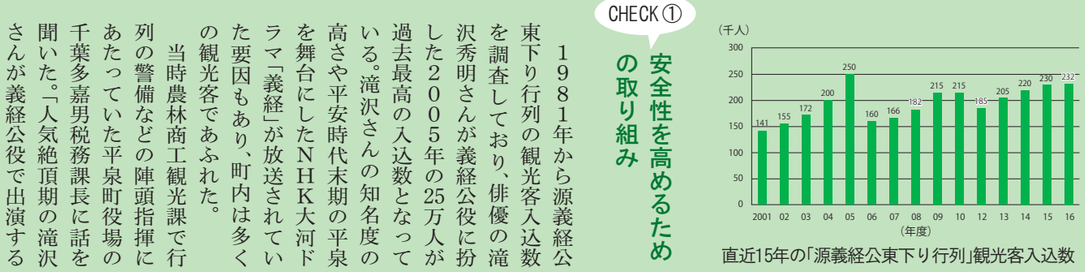
今年義経公役を乗せる馬の名前は「タカラホワイト」。２０１７年２月まで北海道のばんえい競馬で活躍していたという立派な体格と芦毛（あしげ）が特徴だ。明美さんは「タカラホワイトは今年初めて行列に参加する。無邪気な性格をしており、４歳で若く体力には自信があるが、競馬場から出たことがなく、外の景色に慣れていないので、毎日外出して調整している」と話す。

これまで馬の飼育を続けてこれたのは家族の支えがあったからと家族への感謝の言葉を口にする明美さん。「何よりも馬が好きでないとできない。日頃から馬と接し、目を見て会話し、健康状態を把握して衛生管理を毎日している。義経公はもちろん、手入れされている自慢の愛馬にもぜひ目を向けてほしい」と行列への意気込みを語る。

CHECK① 安全性を高めるための取り組み

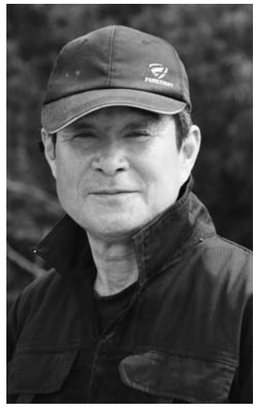
１９８１年から源義経公東下り行列の観光客入込数を調査しており、俳優の滝沢秀明さんが義経公役に扮した２００５年の25万人が過去最高の入込数となっている。滝沢さんの知名度の高さや平安時代末期の平泉を舞台にしたＮＨＫ大河ドラマ「義経」が放送されていた要因もあり、町内は多くの観光客であふれた。

当時農林商工観光課で行列の警備などの陣頭指揮にあたっていた平泉町役場の千葉多嘉男税務課長に話を聞いた。「人気絶頂期の滝沢さんが義経公役で出演することが決まり、これまで以上の人が訪れることが予想された。沿道から観客が飛び出ないように警備会社の警備員だけでなく、警察の機動隊も出動するほどの厳重さだった」と当時を振り返る。「駐車場が足りなくなることも予想されたので、臨時駐車場を増やしたり、自家用車を停めて二次交通を利用するパークアンドライドの推進も図った」などさまざまな対策を実施したことを話す。現在でもそれらの教訓を生かし、観光客および車両の安全かつスムーズな誘導を図るため、事前に町や警察署、消防署など関係機関で綿密な警備計画を打ち合わせることで、安全性を高めている。



直近15年の「源義経公東下り行列」観光客入込数

４月14日に開かれた「春の藤原まつり警備会議」



小野寺（おのでら）　勝彦（かつひこ）さん

３区

《Profile》1953年生まれ。以前は乳牛を飼育していたが、10年ほど前から行列に参加する短角牛の飼育を始めた。毎朝午前４時に起きて、牛の餌やりなどを行ってから仕事に出掛けている。

牛の世話は大変―。しかし日々成長していく牛の姿を見ていると悪い気はしない。

行列に向けて「平」をブラッシングする勝彦さん

平泉観光協会では雄の短角牛２頭を所有しており、そのうちの１頭「平（たいら）」の世話をしているのが勝彦さんだ。行列への協力は、10年ほど前に観光協会から「行列に参加する牛を預かってくれないか」と依頼されたのがきっかけ。「『平』は今年の行列でデビューする。普段は自己主張が強く、甘えた一面も見せる。行列では頑張って北の方の御所車を引っ張ってほしい」と勝彦さんは「平」に優しく声を掛ける。

「餌やりや散歩など、牛の世話は一日も欠かせないため大変。しかし日々成長していく姿を見るのは悪い気はしない」と明るく話す。勝彦さんは「長年続いてきた行列だからこそ今後も伝統を守っていきたい」と決意する一方で心配な点もあるという。「現在牛を飼っている人たちが高齢化しており、行列を続けていくためには若い人たちの力が必要」と思いを話す。

「泉」と世話をする忠輝さん

地域の人や観光協会、東下り保存会の皆さんの協力があったからこそ続けることができた。

石川（いしかわ）　忠輝（ただき）さん

18区

《Profile》1940年生まれ。町内で育てた牛を行列に参加させたいという思いから、10年ほど前に牛の飼育を始めた。牛の世話は大変だが、同時にやりがいも感じているという。

忠輝さんが飼育しているのは、行列で秀衡公の御所車を引く雄の短角牛「泉（いずみ）」。「泉」が行列に参加するのは今年が初めてで、「『泉』は餌をよく食べるので、短角牛としては大きいサイズ。御所車を引く力は問題ないと思うが、おとなしい性格をしており、行列時の人混みや車などを見て緊張してしまうのではないか」と心配する忠輝さん。

牛の飼育を始めたのは、10年ほど前に行列に参加する牛を町外から借りてきている現状を見て「自分でも牛を飼ってみようか」と思ったのがきっかけ。飼育するのは今回デビューする「泉」で３頭目だ。「洗ったり世話をしているときに、牛のかわいさがわかる」と笑顔で話す。

「自分一人だけでは飼い続けることができなかった。地域の人や観光協会、東下り保存会の皆さんの協力があったからこそ」と感謝を伝える。